

「菊を摘むのはなぜ？」

あ つじ てつ し
阿辻 哲次 京都大学教授

菊が美しい季節となった。丹精こめて育てあげた見事な菊の品評会が、あちらこちらでおこなわれている。

菊には実にさまざまな品種があり、大きさも、子どもの頭くらいある大きなものから、親指の先ほど小さなものまである。花の色も白や黄色のみならず、驚くほどバラエティに富んでいる。

さらに菊には薬材的な効能まである。菊の花を詰めた枕は頭痛に効く、と中国の医学書には書かれているし、菊の花びらを入れたお茶は、視神経の疲れを癒すという。

さらに古くは、菊を食べると仙人になれるという信仰があった。世俗の交わりを避け、田園地帯で閑静な生活を送った陶淵明が詠んだ詩（「飲酒その五」）に、

菊を采る東籬の下

悠然として南山を見る

という有名な一節がある。

いおりの東にある垣根のもとで菊を摘み、ふと目をあげれば、遠くにそびえたつ南山の雄大な姿が目に入ってくる、と詩人は歌う。ひっそりと暮らす隠者と菊の取りあわせは東洋的な風雅の趣きを感じさせ、それゆえにこの詩句は古くから人口に膾炙してきた。

しかしここで陶淵明が菊を摘んでいるのは、決して一輪挿しに活けて花をめでようとしてではなかった。彼は実は、夕食のおかずとして菊を摘んでいたのである。